



Data

監督: ジェームズ・マーシュ
 原作: ジェーン・ホーキング『Travelling to Infinity: My Life with Stephen』
 出演: エディ・レッドメイン/フェリシティ・ジョーンズ/チャーリー・コックス/エミリー・ワトソン/サイモン・マクバーニー/デヴィッド・ジューリス/ハリー・ロイド

👁️👁️ みどころ

韓国人俳優のキム・ミョンミンは、『私の愛、私のそばに』（09年）でALS（筋萎縮性側索硬化症）の患者役を演じて、大鐘賞と青龍賞の主演男優賞を受賞した。それに続いて本作では、ALSに罹患し、「余命2年宣告」を受けた、「車椅子の天才物理学者」スティーヴン・ホーキング役を演じたエディ・レッドメインが、見事に第87回アカデミー賞の主演男優賞を受賞！

その「熱演」ぶりにはビックリだが、あなたはスティーヴンの研究内容をどれくらい知ってる？本作の鑑賞については、学問的興味は横に置き、もっぱらスティーヴン教授の人間面に注目したい。

とりわけ、3人もの子供に恵まれたこと、2015年現在、73歳でなお生存していることにビックリ！それを支えた妻との共同作業と夫婦生活はある意味理想形だが、いやいや、それだって・・・。



■□■スティーヴン・ホーキングって誰？その功績は？■□■

ニュートンやアインシュタインの名前は知っていても、あなたは、彼らと並ぶ天才と称された1942年生まれのスティーヴン・ホーキングを知ってる？「車椅子の天才物理学者」と呼ばれた彼は、21歳の時にALS（筋萎縮性側索硬化症）を発症し、「余命2年」と宣告されたにもかかわらず73歳の現在も生き続け、その間に「ホーキング放射の理論」をはじめとする、理論物理学におけるすばらしい功績を残した人物だ。

スクリーンを観ていると、ALSを発症し、車椅子生活を余儀なくされ、日常生活にも支障が生じる中、自分で脱げないセーターを通してストーブを見つめているうちにひらめ

いたのが、「ブラックホールの消滅」らしい。そして、そこから「ホーキング放射の理論」に到達したらしい。ストーリーの中で描かれるそんな1コマは、「なるほど、学者のひらめきとはそんなものか」と思わせるに十分な説得力を持っているが、肝心の中身は私にはサッパリわからない。本作には、スティーヴンを指導したロジャー・ペンローズ教授（クリスチャン・マッケイ）との研究テーマに関するやりとりや、スティーヴンが博士号を取得した後のいくつかの講演の様子が描かれるが、とにかくその内容はチンプンカンプン。

したがって、本作を鑑賞するについては、研究内容への興味は100%捨て、「車椅子の天才物理学者」と呼ばれたスティーヴンの人間性にのみ興味を集中したい。すると、この男、意外に面白いうえ、単純でわかりやすい・・・？

■□■「余命2年男」との結婚の決断は、異例中の異例！■□■

本作冒頭に描かれるイギリスのケンブリッジ大学大学院を舞台とした、理論物理学を研究するスティーヴン・ホーキング（エディ・レッドメイン）と中世スペイン詩を学んでいる、美貌と才能を兼ね備えた女性ジェーン・ホーキング（フェリシティ・ジョーンズ）との一目惚れに近い恋愛ストーリーは1963年当時のことだから、私が大阪大学法学部に入學した1967年の4年前のこと。私の友人の中にも、同じキャンパス内で交際が始まり、スナナリ結婚に至ったケースもあるが、私はその道を選ばず、全く別の世界の女性を求めることになった。

それはともかく（どうでもいいが）、スティーヴンとジェーンの場合は、スナナリ結婚に至れば、互いに違う世界の研究対象を持ちつつ、互いの研究を尊重し合ういい夫婦になることが予測できるもの。ところが、ある日病院の検査を受けたスティーヴンに対して、彼が患っているのは、脳からの命令が神経に伝わらなくなる運動ニューロン疾患（ALS）であり、治療法はなく、余命は2年との宣告が下されたから、大変。

スティーヴンのそんな宣告にジェーンがショックを受けたのは当然だが、今なら引き返すことも可能。現に、自暴自棄になったスティーヴンは、「俺のことは放っておいてくれ！」という態度をとっていたから、今ここでジェーンがスティーヴンとの結婚をやめても、スティーヴンの父親フランク・ホーキング（サイモン・マクバーニー）をはじめ、誰も文句を言う人はいないはずだ。ところが、そこでのジェーンの決断はスティーヴンとの愛を貫くというもので、「みんなで力を合わせて病気と闘おう」と力強く言い放ったから、すごい。ジェーンのそんな決断は、異例中の異例だから、本作を鑑賞するについては、ジェーンがなぜそんな決断をしたのか、また、することができたのか、についてしっかり読み解きたい。

■□■原作は？長い結婚生活で、子供は？■□■

本作は、ジェーン・ホーキングが2007年に出版した『Travelling to

『Infinity: My Life with Stephen』を原作としたものだが、その本の中には、余命2年宣告を受けたスティーヴンとの25年間に及ぶ壮絶な結婚生活が描かれているらしい。ALSに罹患した人間の平均余命は5年程度だから、スティーヴンが73歳になった2015年まで生きていること自体が奇跡だが、ジェーンはスティーヴンと結婚する時にALS患者である夫がここまで生存することは全く想像していなかったはずだ。夫婦生活はいろいろなパターンがあることは、弁護士兼映画評論家の私はよく知っているが、本作のような夫婦生活はまさに例外中の例外。だからこそ、『Traveling to Infinity: My Life with Stephen』を読んだジェームズ・マーシュ監督が、是非映画化したいと願ったわけだ。

私が何よりも不思議に思ったのは、ALSに罹患し、車椅子生活を余儀なくされているスティーヴンとジェーンとの間にロバート、ルーシー、ティモシーという3人の子供が生まれたこと。本作はシリアスなドラマだから、ユーモラスなシーンは2人が恋に落ちる青春時代しか登場しないが、実は結婚生活においてもスティーヴンはひそかに雑誌『ペンthouse』を購入していた様子がユーモラスに描かれるから、ALSに罹患しているとはいえ、「あの方面」はお盛んだったらいい。健常者でも、子供ができないことに悩んでいる夫婦がたくさんいることを考えれば、スティーヴンとジェーンとの間に3人の子供が生まれたことに、とにかくビックリ！



『博士と彼女のセオリー』2015年3月13日(金)TOHOシネマズ梅田他全国ロードショー
© UNIVERSAL PICTURES 配給:東宝東和

■韓国版ALSも主演男優賞だったが、本作も見事に！■

「難病モノ」の名作は、韓国では『私の頭の中の消しゴム』（04年）（『シネマルーム9』137頁参照）、日本では『世界の中心で、愛をさけぶ』（04年）（『シネマルーム4』122頁参照）を代表としてたくさんあるが、本作のスティーヴンと同じALS患者のペク・ジョンウ役を演じた韓国の俳優キム・ミョンミンが、2009年大鐘賞と青龍賞の主演男優賞を受賞した名作が『私の愛、私のそばに』（09年）（『シネマルーム26』69頁参照）。同作では、妻のイ・ジス役を演じた女優ハ・ジウォンも青龍賞の主演女優賞を受賞した。

ジスも本作のジェーンと同じくジョンウがALSに罹患していることを知りながら恋に落ちて結婚し、ジョンウの献身的な世話を続けたが、数年後ジョンウは死亡してしまった。それと比べれば、本作にみるスティーヴンはホントに奇跡的に長生きしているわけだが、ウィキペディアで見る本物のスティーヴンの姿と、スクリーン上で見るスティーヴンの姿はまさに瓜二つ。こんな演技によってスティーヴンを演じたエディ・レッドメインは、①『フォックスキャッチャー』（14年）のスティーヴ・カレル、②『アメリカン・スナイパー』（14年）のブラッドリー・クーパー、③『イミテーション・ゲーム エニグマと天才数学者の秘密』（14年）のベネディクト・カンバーバッチ、④『バードマン あるいは（無知がもたらす予期せぬ奇跡）』（14年）のマイケル・キートンという4人のライバルを振り切って、第87回アカデミー賞主演男優賞を受賞したのは、実にお見事！

昨年11月20日に観た『幸せのありか』（13年）でも、脳性麻痺の障害者役を演じたダヴィド・オグロドニクの演技が光っていたが、俳優にとってはこの手の「難病モノ」の役は願ってもないものかも・・・。

■3番目は誰の子供・・・？一種の「三角関係」に注目！■

車椅子のままでも研究を続けるスティーヴンの学問上の成果は次々と上がっているらしいが、前述したように、私にはその方面はチンプンカンプン。したがって、私の注目点はスティーヴンの介護と子供たちの世話に明け暮れる中で、次第に疲れ果ててくるジェーンの姿になっていく。そんなジェーンに対して、気分転換のため、週に1度だけでも教会の聖歌隊に通うことを勧めたのは母のベリル・ワイルド（エミリー・ワトソン）。無神論者のスティーヴンに対して、ジェーンは神を信じ、教会を信頼していたうえ、歌が大好きだったから、これが絶好の気分転換の場になったのはまちがいない。

しかし、そこで知り合った聖歌隊の指揮者ジョナサン・ヘリヤー・ジョーンズ（チャーリー・コックス）がロバートにピアノを教えるため、スティーヴンの家に入出入りするようになると、事態は一変することに・・・。つまり、ジョナサンは独身で時間的に余裕があることを理由に、スティーヴンの介護の手伝いをするようになったわけだ。それ自体には何も問題ないが、ジョナサンが家族の一員のように、夫婦と子供たちの間に溶け込んでい

る姿を見ると、誰だってアレレ、と思うのは当然。そんな状況下で3人目の男の子ティモシーが生まれると、ベリルが「ティモシーは誰の子供？ひょっとして、ジョナサンの子供では・・・？」と疑ったのは、ある意味当然。それに対してジェーンは「私はそんな女じゃない！」と猛然と反論し、スティーヴン自身もジェーンに対して何の疑いも持たなかったが、そんな状況下、夫婦生活にはいかなる波乱が・・・？

■さらに、一種の「四角関係」にも注目！■

毎年7月から8月にかけてドイツ連邦バイエルン州北部フランケン地方にある小都市バイロイトのバイロイト祝祭劇場で開催されるワーグナーの歌劇・楽劇を演目とするバイロイト音楽祭に1度も行ったことがない私は、生きている間に1度は行ってみたいと願っている。しかし、スティーヴンのような天才物理学者になると、ヨーロッパのオペラの公演への「ご招待」は当たり前・・・？

本作後半には、そのオペラ公演の最中に咯血して病院に担ぎ込まれるスティーヴンの姿が登場する。病名は肺炎。現地のドクターはジェーンに対して、昏睡状態にあるスティーヴンの生命維持装置を外すことまでアドバイスしたが、ジェーンはそれを断固拒否。喉を切開して呼吸装置を付けることによって、たとえ声が出なくなっても、スティーヴンは生かせる必要がある。命を失うか、声を失うかの二者択一を迫られた時、迷うことなくジェーンが選択したのは後者だった。

そんな手術によって生きながらえたスティーヴンには『幸せのありか』で観たのと同じような、目の「瞬き」で文字を選ぶと言う新たな訓練が始まったが、そこでスティーヴンの看護師兼教師役として登場した女性がエレイン・メイソン（マキシン・ピーク）。スティーヴンの治療風景を見ていると、医療や介護の進歩に驚かされるが、同時にそれを支えるのはエレインのような、その道のプロだということがよくわかる。それはそれでいいのだが、コンピュータプログラムによる合成音声を使つての意思疎通がエレインとの間で煩雑になるにつれて、前述した「三角関係」とは違う、別の三角関係ともいえる男女関係が……。こうなると、一種の「四角関係」に・・・？

結果的にスティーヴンとジェーンは1991年に離婚し、ジェーンはジョナサンと再婚している。他方、スティーヴンは1995年にエレインと再婚しているから、そこらあたりの「三角関係」「四角関係」には微妙なものがあったはずだ。本作後半はそこらあたりをかなりボヤカして描いているのが私には少し不満だが、エレインの登場に見る一種の四角関係の発生にも注目しながら、スティーヴンの壮絶としか言いようのない「生きザマ」をじっくりと観察したい。

2015（平成27）年3月18日記